第805号 平成24年6月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日　第三種郵便物認可

2012年（平成24年）
6月号（No. 805）
公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部　150円
会員の会報購読料は年会費に含まれています
URL●http://www.jac.or.jp
e-mail●jac-room@jac.or.jp

海外登山助成金支援
パタゴニアとナムナニからの報告

日本山岳会の海外登山助成金（旧海外登山基金）は、1989年創設以来20年以上にわたって隊を支援してきた。近年では、助成を受けた隊のピオレドール賞受賞もあった。今回は、花谷泰広さん、横山勝丘さんのパタゴニア（1～3月）、平出和也さん、谷口けいさんのナムナニ（昨年10～11月）から届いた報告を掲載する。

パタゴニア〝初心者〟が味わった辛酸と歓び

横山勝丘

■フィッツロイ北西リッジへ

2012年1月17日から3月18日までの2カ月間、信州大学学士山岳会の花谷泰広と横山勝丘は南米パタゴニアに出かけた。ベースとなる町はエル・チャルテン。ねらいはフィッツロイ登頂だけでなく、周辺で「登り倒す」ことである。

好天に恵まれた最初の一週間で、ぼくたちのターゲットはおおかた決まった。北面のクアドラドのコルからフィッツロイを眺めると、ひときわ目立つリッジが山頂に向かって延びているのがわかる。これが1979年にフランス人によって初登された北西リッジ、通称アファナシエフ（1500メートル、6C）だ。ふたりは、「山を見れば登りたいところは、おのずと見えてくるだろう」くらいにしか考えてこなかった。「まあとりあえずフィッツロイの山頂には立ちたいよな」という気持ちだけはもっていたのだが、アファナシエフを見た瞬間、「まずはこれをやろう」と思った。それだけ目立つリッジだったし、パタゴニア初心者のふたりがフィッツロイの山頂に立つには最適に思えたからだ。

ちょっとレストしたらすぐに登りにいこうと思っていたのだが、そうこうするうちに悪天周期に入ってしまった。インターネットの週間予報は絶望的な予報しか出さないし、もっと専門的なサイトを見ても、雨はそれほどでなくてもものすごい強風の予報が出されている。しかしその強風の恐ろしさというものを、ぼくたちはまるで知らない。ここには来たこともないし、風速○○メートルという数字がいったいどれだけの威力なのかということに関しても、まるでイメージが湧かなかった。経験豊かな周囲のクライマーは言う。「今は論外だよ、じっくり待つべきだ」。きっとそれは正しいのだろう。でも……との思いは捨てきれない。

これまでの登山の経験から、ある程度は悪天時にも行動しなければならないことも知っていたし、こうやって街中で快適な生活をしながら好天を待つという行為に少なからぬ違和感を覚え始めていた。

悪天周期に入って一週間たったころ、週間予報が少し好転した。

目　次

海外登山助成金支援
　パタゴニアとナムナニからの報告‥ 1
ウェストン碑の顕彰
　レリーフとその設置写真を発見‥ 6
会員の渡邉玉枝さん、エベレスト登頂
　女性最年長記録更新‥‥‥‥ 7
追悼　宮下啓三先生を悼む‥‥ 8
活動報告‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 9
　図書管理・資料映像委員会共催／図書委員会
支部だより‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 11
　東京多摩・山梨・埼玉支部共催／四国支部
図書紹介‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 13
図書受入報告‥‥‥‥‥‥‥‥ 14
会務報告‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 15
ルーム日誌‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 16
会員異動‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 17
新入会員‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 17
INFORMATION ‥‥‥‥‥‥ 18

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月・火・木‥‥‥‥‥‥‥10～20時
水・金‥‥‥‥‥‥‥‥‥13～20時
第2、第4土曜日‥‥‥‥‥‥閉室
第1、第3、第5土曜日‥‥10～18時

これはチャンスと思ってぼくたちはアプローチを開始したが、たった標高500㍍の樹林帯のアプローチの時点で、「これは厳しいな」と実感せざるを得ないほどの強風が吹き荒れていた。強風によろめきながらベース予定地までたどり着いたその瞬間、ぼくたちの体はなす術もなく強風に浮き上がった。標高1500㍍のこの場所でこの風なら、ここより2000㍍以上高い山頂はどうなっているのだろう？　考えただけでも恐ろしい。ぼくたちはここまできてようやく、強烈なまでに思い知らされたのだった。「無理なものは無理なのだ」と。

結局、悪天は3週間も続いた。まあだからといってなにもできないわけではないのがこの場所のよいところで、山は天気が悪くても、街の裏では質の高いボルダリングが楽しめたし、ときには山懐まで軽くランニングにいったりと、それなりに楽しむことができた。

しかし、街にあふれかえっていたクライマーの姿が日に日にまばらになってゆく。どんどん寒くなっているのが手に取るようにわかるし、昼間の時間だって急激に短くなる。ぼくたちも本気で転戦を考えたのだが、友人のアドバイスもあって、最後の最後で移動を思いとどまった。

アファナシエフの中間部リッジを登る花谷

2月17日。待ちに待ったアファナシエフの登攀だったのだが……。ルートに対するナメた気持ちが心のどこかにあって、さっさと壁を抜けて下りてこられるだろうといった期待があったのは事実である。にもかかわらず、壁の上では何度もルートファインディング・ミスを犯し、そのたびに時間を浪費する。そして疲労はどんどんと蓄積していった。結局のところ、この山のクライミングに対しての知識も技術も経験も、なにももっていないという厳然たる事実があったわけで、タクティクスなどのミスが積み重なった結果、標高差にして600㍍を登った時点で「壁の条件が悪い」といういかにもまっとうな理由を作り上げて、ぼくたちは敗退を決めた。

下山直後は、もうフィッツロイはいいやと思っていたし、シーズンが終わりを告げ始めていることもわかっていた。しかし、一度乗りかかった船だ。ここでやめるわけにはいかない。やっぱりフィッツロイくらいは登って帰りたい。

■北ピラーへ転戦

2月21日。ふたたびリオ・エレクトリコの登山口からピエドラ・ネグラに向かう。今回のねらいは北ピラー、山頂までの標高差は1200㍍。顕著なクラックをたどる明瞭なラインで、外的危険が少ないのと、少しでもクライミングそのものを楽しめるルートを、との思いからルートを選択した。

壁の取り付きでビバークした翌朝は、陽が射し込まないこともあって、想像以上に寒かった。やっとのことでクライミングを始めたときにはすでに10時を過ぎていた。

岩はアファナシエフとは比べものにならないほど硬く、陽が射し始めてからはペースも上がり、2ピッチ交代でぐんぐん高度を稼ぐことができた。5・10前半レベルのピッチがずっと続き、プロテクションを取るのも苦労しないほどスッパリと割れたクラックを登り続ける。まさに、「楽しい」という言葉がぴったりのクライミングだった。5・11bの核心ピッチも問題なく越え、日が暮れても登り続けた。結局この日は、夜中の一時まで登り続けたにもかかわらず快適なテラスを見つけることができず、傾いた斜面で不快なビバークとなってしまった。

翌朝は昨日以上の寒さで目が覚めた。まるで行動を起こす気にならない。そうはいっても今日中に山頂に立ちたいし、あわよくば下降を始めたい。10時になって無理やりに行動を開始するが、あまりの手の冷たさに、最初のピッチは30㍍しか登れなかった。しかしその後は快適に登攀を続け、2時間でピラーの頂上にたどり着いた。眼前のヘッドウォールには雪氷が付着しており、5・11aが3ピッ

チ続くこの出だしは、このルートの隠れた核心でもあった。しかしせっかくここまでオールフリーで登ってきたので、がんばってフリーで越えることにした。結果的には、5・11台のピッチは思っていたほど難しくもなく、オールフリーで越えることができた。

ところが、もう山頂まで残り2ピッチほどの緩傾斜帯で、ぼくは不注意から痛恨のフォールを犯してしまった。

全ピッチのオンサイトをねらっていたわけでもないのだが、99％（パー）登り切った場所で、しかも簡単なグレードのピッチでのフォールには少しへこんだ。しかもアバラをぶつけてしまい、しばらくは痛みに耐えるのに苦労しなければならなかった。気を取り直して登り返し、次の簡単なリッジを登ると、あとは雪の斜面が山頂に向かって続いているだけだった。後味の悪いフィナーレだったが、すぐ上にはあれだけ待ちに待ったフィッツロイの山頂があると思うと、単純に喜びは隠せなかった。同時登攀で斜面を上がると、想像以上に広いフィッツロイの山頂があった。

翌朝、ぼくたちは山頂の大パノラマを堪能してから下降に取りかかったが、実はここが核心なんじゃないかと思えるほど複雑な懸垂下降を強いられた。ぼくたちが安全地帯の氷河に下り立ったのは山頂を発ってから8時間が経過していた。

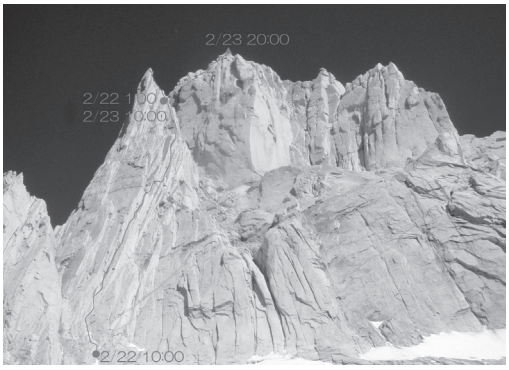
フィッツロイ山頂の花谷（右）と横山

■次なるパタゴニアへ向けて

こうしてぼくたちの2カ月はあっという間に過ぎていった。当初思い描いていたプランはひとつも達成できずに終わったし、ぼくたち自身の弱さもいやというほど思い知らされた。でも裏を返せば、「パタゴニア初心者」なのだから、何もできなくて当然と言えば当然である。言ってしまえば、ここは「通う山」である。通えば通うほど、パタゴニアの奥深さが見えてくる。そして、より洗練されたタクティクスとより強いクライマーとなって、ここに潜む大きな可能性に挑むことができるようになるのだろう。そういう意味では、来年以降もしばらくは通ってみたい。これからどんなクライミングを実践できるのか、今から楽しみである。

期間：2012年1月17日～3月18日

メンバー：花谷泰広、横山勝丘（ともに信州大学学士山岳会）



フィッツロイ北ピラーのルート概要

チベット・ナムナニ未踏の南面踏査と縦走登攀

谷口けい

■ナムナニ南面までの道のり

西チベット高原に座する聖山カイラスは、ヒンズー教徒とチベット仏教徒の聖地であり、遠方各地から巡礼者が訪れる。威圧感ある存在は、宗教を超えて世界中の冒険心ある者たちをも惹きつける。カイラスを訪れた巡礼者たちの目に、ほぼ間違いなくとまる景色がある。カイラスの南に位置する深く青いマナサロワール湖と雄大な白い峰ナムナニ（7694メートル）だ。

この山は、1985年に中国登山協会と京都大学、同志社大学合同の日中友好登山隊によって北西面から初登された。以来5～6登が北西面からなされ、ノーマルルートと呼ばれるようになる。ノーマルルート以外のラインが登られたのは、99年の日本ヒマラヤ協会隊による北稜から東壁上部をつないだもので、それ以外の登攀記録を見つけることはできなかった。

私たちがこの山に惹かれ続けたのは、まったく未知であった南面の氷河と南東壁の存在だった。

情報を集め始めるが、ナムナニ南面に関する情報は皆無で、そんな未知の領域に、冒険心はますますくすぐられ、惹かれていった。

私たちのやりたい「ナムナニ南面踏査と南東壁登攀、そして北西面への縦走」について、チベット登山協会とはずいぶん前からやりとりをしていた。けれど、日本出発直前に送られてきた登山許可証には、ただ、「ノーマルルート」と記載されていた。しかも標高は「7094メートル」と間違っている。相変わらずのチベット登山協会だ。溜息つきながらも、現地に行ってから許可ルートが違うと言って追い返されては大変と、確認の問い合わせをするも、返答は「ノープロブレム」。問題ないから来なさい、という。

朝霧に包まれるなかルートを探る

■幻のロンゴー谷へ

リエゾンオフィサーのタシは、何度もナムナニ登山隊に同行したことがあるが、ロンゴー谷なんて本当に存在するのかさえ知らなかった。だだっ広い高原のなかで、ヤギ使いを見つけては「ロンゴー谷ってどこにあるのか？」と聞き、ベースキャンプへの荷役用馬を手配するのに奔走してくれた。彼が馬の手配をつけている間、こちらは謎のロンゴー谷入口を探る。深いゴルジュの門があり、両岸は切り立った崖だ。この谷のなかを遡行するなんて考えられなかった。

陽気な馬方たちと崖のはるか上部のガレ場を越えて、入谷に成功する。しかし悪路のため、予定していた地図上のベースキャンプ地点の半分の行程のところで馬たちとリエゾンオフィサーのタシはそれ以上進むことをやめ、村へと帰って行った。ここに私たちのベースを作り、この先の探索はわれわれのみの独占として残された。東西に延びるこの谷は、東から昇る太陽が西に沈むまで一日中暖かく照らされていた。

10月9日、主峰登頂の平出（右）と谷口

■南東壁の偵察

ベースキャンプからロンゴー谷を丸一日上流へ進むと、氷河の舌端に出合う。誰にも触れられていない不安定で恐ろしいモレーンを行く。谷が北へと向きを変えたところで、ようやくナムナニ南東壁が姿を現わした。滞る雲の隙間から、壁が見えてくる。壁の真下からこちらへと延びている氷河がとてもきれいだ。モレーンのなかにごろごろ転がっている大岩のひとつに攀じ登って、テントを張る。目の前にナムナニ南東壁。朝日が壁全体に差すと黄金色に輝いた。なんと神々しい壁だろう。間違いなく美しい山容だ。三角形の頂上に突き上げる、ど真ん中のリッジの上部左右にセラックが懸かっている。右のセラックが2度崩壊して、大きな雪崩が南東壁の右半分を覆う。雪崩に触れないよう、忠実にセンターリッジにラインを描く。そして、太陽の移動とともに変化する壁の姿を眺める。この壁にラインを引けるとしたら、セラックの間のセンターリッジ一本だけだった。

■南東壁の夢は破れ

偵察と準備を終え、2週間後に出かけた南東壁は、偵察時と比べると明らかに黒くなっていた。雪や氷が、連日の晴天により落ちて白い部分が減っていた。取り付き近くの氷河上にテントを張り、予想外に黒くなった壁を前にして、決めていたはずのライン取りを何度も試行錯誤する。やっぱり元々決めていたラインでいこう、ということで出発。壁の際まで来たとき、頭上はるか上でドンっと音がして、セラックの崩壊雪崩がやってくるのが見えた。はじめに小石

や氷塊が降ってきて、続いてチリ雪崩が襲いかかってくる。ふっ飛ばされるまいとアックスを打ち込んで壁にへばりつく。雪崩の影響を受けないライン取りを考えるが、予定していた左寄りの細い氷のガリーは、ひっきりなしに小石や氷が降ってくる。しかし右へ行けば行くほど、セラック崩壊のリスクが高い。

　ふたりは、何度か意見を交わしつつ、偵察のときとは違う壁の状態に惑わされながら、岩・氷・雪壁をつないで右のリッジ状へとルートを延ばす。不安定な岩にナッツをきめ、アックスを振ってぐさぐさの氷の下にあるちょっとは安定した氷を掘り出してスクリューハーケンをうち、すかすかの雪にスノーバーを差し込んで、ごまかしながら登って行った先に見た、新たなる壁の様子に圧倒される私。頭上にせまるセラックを認めて、今すぐ下りようという平出。状況は、予想よりはるかに悪い。

　自分の弱い部分とはしっかり向き合って絶対逃げない、と決めてきた今回の登攀だったが、自然の脅威が相手では、こちらがいくら気合を入れてもリスクはゼロにはならない。逃げて生き延びるのが、自然を相手に遊び闘う者の掟だ。しかし、描いていた夢のラインが破れていくのを受け入れるのは、そんなに簡単ではなかった。

■そしてつないだライン

　とぼとぼベースキャンプへ帰ったわけだが、相変わらず天気はよく、未踏の谷も稜もまだたくさんあり、しかし食糧だけは尽きかけていた。次を行くなら今しかない。これはラストチャンスだ。もう絶対にベースキャンプには戻って来ないと誓って再出発。いまだ足を踏み入れていなかったガリーのひとつに取り付く。一歩ごとに足元の動くモレーンを遡り、５６００㍍地点で氷河の末端に出合う。幾筋もの氷河の川を渡って、氷の斜面を登ると、クレバスのほとんどないプラトーがつながっていた。一見安定して素晴らしいプラトーなのだが、表面がかりかりの氷で、踏みぬくと中はスカスカの雪。辛いラッセルを強いられた。

山頂の向こうに望んだ念願のカイラス

　それが６５００㍍辺りから、ものすごい景色が広がり出す。東にはチベットの名もわからぬ峰々、南にはアピ、サイパルをはじめとする西ネパールの秀峰が連なり、西にはインドヒマラヤの鋭鋒が威容を誇っている。ナンダ・デヴィ、チャンガバン、カランカ、そしてチベット高原の彼方に威風堂々とそびえるカメットがそこにいた。08年に私たち2人が登った南東壁のラインが、こんなにはっきりと下から頂上まですべて見ることができる場所が、この世界に存在するとは思ってもみなかった。

　氷雪壁から不安定な雪庇を越えて７０００㍍の南西稜に出ると、大パノラマを背負っての登攀が続いた。不安定な氷雪壁、リッジ、ラッセルの向こうに未踏のナムナニ南峰があった。雪庇の張り出した南峰頂上に至ると、最初目指した南東壁の最上部が目の前にあり、その右肩にマナサロワール湖が見えた。南峰から主峰へは、ほとんどが岩混じりの氷雪壁。核心は寒さだった。天気は快晴なのに、登るそばから体が凍りついていく。手も足も顔も。泣きたいくらい冷たくて痛く、涙も凍る。夜を越すたびに、自分たちの体もテントごと凍ってしまうのではないかと思う程だった。こうして辿り着いたナムナニの頂上、登りつめた瞬間、聖山カイラスと2つの湖が約束通り目の前にあった。

　下降は、「登ったルートを下ること」というチベット登山協会の決まりにしばられているのだけれど、「登攀ルートへの下降は危険すぎるため」ノーマルルートの北西面を「やむなく」下りることにして、ナムナニ南面から北面への縦走を完結させることに成功した。

　とは言え、初見で下った北面ノーマルルートは危険に満ち満ちていた。

期間：２０１１年９月13日～10月10日

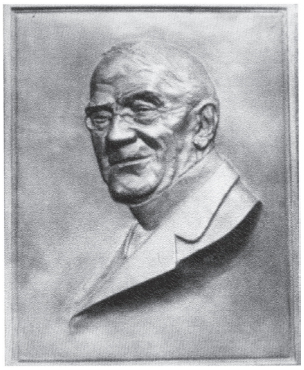
メンバー：平出和也（ＩＣＩ石井スポーツ所属）、谷口けい

トピックス

ウェストンの顕彰レリーフと当時の設置写真を発見

英国の宣教師ウォルター・ウェストンの功績を称えた師の記念レリーフが、上高地の梓川畔にあるのをご存じだろう。毎年6月の第一日曜日に、その碑の前でウェストン祭が開催されている。今年も6月3日の日曜日に、尾上昇会長を迎えて第66回ウェストン祭が開催され、地元の小学生が歌を披露するなど日本山岳会の恒例行事となっている。

ウェストンのレリーフには少し悲しい歴史が秘められている。梓川畔の岩に、師のレリーフが最初に取り付けられたのは、1937（昭和12）年のことだった。制作したのは、キャラバンシューズの生みの親でもあった彫刻家の佐藤久一朗氏で、縦62・5センチ、横45・5センチの額面型で、8月26日に上高地の花崗岩に取り付けられた。


取り外される前の角形のレリーフ

ところがそれからわずか5年後、戦争の足音が次第に大きくなってきた1942年（昭和17）年、急に取り外されることになったのだ。敵国の宣教師だからということもあり、さらに鉄を確保しておく必要も生じたことから、軍の圧力を受けた日本山岳会は、12月8日、秘かにレリーフを取り外し、東京・虎ノ門の山岳会のルームに保管したという。それが1945（昭和20）年5月25日の東京空襲で、一部を破損してしまったのだ。

だが、終戦後の1947（昭和22）年6月14日、ウェストン碑が上高地で復元されることになった。その上高地に戻す様子を撮影した写真が、岐阜市の河合千之さん宅で見つかったと、岐阜新聞6月2日付朝刊の一面に掲載されている。撮影したのは、千之さんの父で日本山岳会会員だった逸水氏。写真は5月初旬、自宅の書棚に残されていたのが見つかったもので、「22・6・12―18　上高地　平湯　ウェストン除幕式」と書かれたメモとともに、8カット撮影したネガが残されていたという。そのうちの1枚は、当時の日本山岳会会長の松方三郎（1899～1973年）が、「ウェストン師之像」と墨書された写真とともに写り、また関係者と思われる法被姿の男性が大きな岩に立てたはしごに乗って設置している姿も写されていた。

現在のウェストンの円盤形のレリーフ

新聞によると、「レリーフの復旧を撮った写真の存在が分かったのは初めてではないか。文献などで伝え聞いていた場面を写真で見られるとは思わなかった」という談話ものっている。メモは、河合逸水氏が上高地と平湯に滞在した期間、昭和22年6月12日から18日までであることを表わし、上高地での復旧式が6月14日であった事実とも合致するという。

なお、現在の円盤形の銅板碑は、やはり佐藤久一朗氏が改作したもので、1965（昭和40）年、設置されたものである。久一朗氏の夫人の話だと、損傷した先代レリーフをもとに、新しいものが完成したとき、久一朗氏が自らの手で処分したとのことである。

トピックス

会員の渡邉玉枝さん、エベレスト登頂
女性世界最年長記録更新

渡邉玉枝さん（会員番号112 14）が、5月19日に中国側からエベレストに登頂。これにより、本人がもっていたエベレスト登頂女性世界最年長記録を更新した。前回渡邉さんが登ったのは、ちょうど10年前、ネパール側からだった。「はたして、中国側のルートはどうなっているのだろう」とずっと気になっていたという。2002年の登頂後も、エベレストやローツェ（登頂）を訪れる機会はあったが、その後、05年に第一腰椎を骨折するという大ケガをし、登山から遠ざからざるを得ない時期もあった。人工腰椎を入れ、低山歩きから始め、08年にはモンゴルの最高峰フィティン（4374メートル）に登頂。「徐々に体力も戻ってきたので、またヒマラヤに登りたくなったんです」と、話していた。

山頂の渡邉さん（撮影＝村口徳行）

パートナーは映像カメラマンの村口徳行さん。かつてエベレストと、ローツェの頂を共に踏んでいる旧知の仲だ。今回も渡邉さんは、村口さんに「今年の春、一緒にエベレストに登らないか」と持ちかけたという。渡邉さんは村口さんのことを、「緻密なタクティクスを立て、間違いのない適確な判断を下す人」と全幅の信頼を置いている。またこのたび、村口さん自身は7回目のエベレスト登頂となり、自らがもつ日本人最多記録を更新した。そんな、村口さんの堅実な登山、豊富な経験は、自著『エベレスト登頂請負い業』（山と溪谷社刊）で読むことができる。

登頂した19日は、風は強いものの天気は快晴だった。ネパール側からも多数の登山者が登頂したという。空は晴れ渡り、展望もよく、爽快だったと渡邉さんは回想する。

渡邉さんは、「ネパール側と比べると、今回の方が苦労しました。岩稜のセクションが多く、手間取ったし、長く感じられましたね」と言う。しかしそれでも、ファイナルキャンプから山頂まで約11時間。足が速いのは、日本の山でもヒマラヤでも変わらない。俊足の渡邉さんは、健在だった。

歳を重ねても揺るぐことのない渡邉さんの強さは、どこにあるのだろうか。誰もに愛される穏やかな人柄と、笑顔が印象的な渡邉さんであるが、いったい彼女のどこに強さが秘められているのだろうか。カトマンズからの電話口で彼女は、「いつものように家族やごく親しい人にしか行先を告げずに、日本を出たんですよ」と話していた。特別な気負いはなく、登りたい山へ向かう気持ちは、その先がたとえエベレストであろうと、近所の裏山であろうと、日本の厳冬期の山であろうと、まったく変わらない。渡邉さんのすごさや魅力は、こんなたおやかな姿勢や精神にあるのではないだろうか。そしてそれが、彼女のタフな行動につながる。

25日には、カトマンズで記者会見が開かれ、ギネスブックにも記録された。このような世界的な記録を樹立しながらも、渡邉さんの様子はいつもとまったくかわらなかった。「帰国後は、三ツ峠や黒岳、御坂山塊などの山を歩くことから始めようと思っています。私の住んでいる河口湖町の近くには、いい山がたくさんあるんですよ」と語っていた。

（柏　澄子）

追悼
OBITUARY

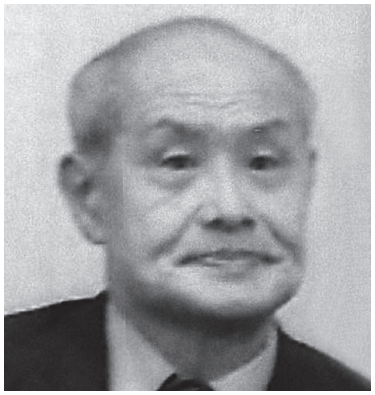
宮下啓三先生を悼む

箕岡三穂

5月6日、宮下啓三先生がお亡くなりになられた。葬儀は日本キリスト教団藤沢教会で執り行なわれ、先生の死を悼む多くのお弟子さんたちが参列されていた。もちろん、日本山岳会からも先生と親しくされていた方々が多数参列されておられた。

牧師からの故人を偲ぶお話では、先生の学識、人格の優れていたことに話が及びまったくそのとおりだと思われた。先生にはもうかれこれ10年以上にわたって、土曜会、三水会で懇意にしていただいた。その記憶が嬉しくまた淋しい。

先生は幼稚舎に始まり、慶應義塾大学文学部大学院を経て、文学部教授、そして、名誉教授でお亡くなりになるまでその一生涯を慶應義塾で過ごされた。出色のドイツ文学者、ジョン・ラスキンの研究者でもあったが、山にも造詣が深かった。



宮下啓三（みやした・けいぞう）
1936年　東京に生まれる
1959年　慶應義塾大学独文科卒業
1963年　日本山岳会入会（会員番号5546）
1965年　慶応義塾大学文学部大学院博士課程終了
1977年　慶應義塾大学より文学博士を賜る
1978年　日本観光文化奨励賞受賞
1999年～2002年　日本山岳会理事を務める
2012年5月6日　胆管がんのため逝去。享年75

ドイツ文学専攻であるがジョン・ラスキンの研究家としても知られた。また、山に造詣が深く文学と山岳の領域で著書、訳書多数。専門はドイツ演劇、スイス文化史。三田文学会理事。
著書に『スイス・アルプス風土記』『ウィリアム・テル伝説 ある英雄の虚実』『日本アルプス 見立ての文化史』など多数。

日本山岳会には昭和38年5月入会（会員番号5546）、紹介者は折井健一、鈴木郭之の両氏であった。また、1999～2002年は山岳会理事を務められた。

先生は大学山岳部などには属さず、好きなときに好きなように登山をしてきたと言っていた。けれども、徳本峠からの穂高岳を見たいと島々谷に入ったときのこと、入口に何人かの登山者がいて、何となく一緒に歩き出した人たちが日本山岳会の会員で、坂倉登喜子さん、折井健一さん、中保さん、錦織保清さんらであったと「三水会35年記念誌」に書いておられる。

そしてその縁で日本山岳会に入会し、その後三水会が立ち上がって入会された。三水会ではたびたび講話をしていただいた。スイスアルプス、日本アルプスの話が多かった。

土曜会とはもっと古いご縁であるらしく、土曜日にたまたまルームを通りかかったら数人の人たちがウイスキーを飲んでおられ、そこに引っ張り込まれて土曜会にも通うようになったと、先生からのお手紙に書いてあった。そして、古い土曜会でも今の土曜会でもお出でになられると、必ず何枚かの似顔絵を描いてくださる画人でもあった。

先生は筆まめで三水会、土曜会などの用件でご連絡をさしあげると、必ず万年筆で書いたお返事を下さった。達筆というよりなんとも言えない文人墨客の雰囲気のある字であった。もうあのお手紙にお目にかかることもない。残念というより淋しい。日本山岳会にとってかけがえのない大切な方を失ったという想いである。

いまはただ先生のご冥福を祈るばかりである。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

図書管理・資料映像委員会共催

加賀正太郎の生涯と『蘭花譜』を語る

5月19日、104号室において、表題の講演会が開催された。講師は、加賀正太郎の『蘭花譜』について詳しい大塚融氏（一橋大学如水会会員、元NHK経済部記者）にお願いした。

『蘭花譜』は学術上重要な植物図譜と、木版画の伝統技術が一体となった貴重な画集で、「日本の蘭の彩色図譜」の傑作と称えられている。その『蘭花譜』が当会に寄贈され、資料として保存されていることを知っていただきたい。

『蘭花譜』講演会開催の経緯

戦後間もない昭和21年、加賀正太郎は『蘭花譜』第1輯として300部を刊行し、そのうちの100部を、海外各国の大学、博物館、美術館へ贈呈することを思いついた。加賀の気持ちとしては、第二次世界大戦では、日本国は敗戦に終わったが、日本の文化は健在であることを伝えるためであったと思われる。

そして、その第1輯の初刷りの『蘭花譜』は、日本山岳会へ贈呈したいとの意向を遺言状に残した。

昭和29年、加賀名誉会員が他界された直後、遺言により洋蘭の木版画など計104点、『蘭花譜序』の小冊子、書簡類が木製の専用箱に収納されて当会に届いた。

当初、お茶の水のルームで図書委員会が受領し、2階の部屋に保管してあったと思われる。その後、ルームの移転に伴い転々と移動し、今日に至った。

そしてこのたび、大山崎山荘に近い吹田市に住む、近代洋風数寄者研究家の大塚融氏から、「自分が講師を引き受けるから、日本山岳会所蔵の『蘭花譜』と加賀正太郎名誉会員をテーマに映像を交えた講演会を行ないませんか」、との提案があり、準備が始まった。

加賀名誉会員の曾孫にあたる加賀マキシミリアン正太郎、北川喜芳（マキシミリアン後見人）、新味正道（摺師、新味三郎氏子息）関係者各位、講師の助手の杉原領、上由美子両氏の協力を得て、意義ある講演会のはこびとなった。

ユングフラウ（4158メートル）頂上に立つ正太郎（左）とヘスラー

名誉会員加賀正太郎の生涯

加賀は明治21年1月、大阪高麗橋にて、父・加賀市太郎、母・レイの長男として出生。明治40年（19歳）、東京府立第三中学校に通う。クラスメイトには、山好きで画家志望の中村清太郎がいた。中村が富士講に参加した経験があったこともあり、加賀と中村が中心となり「原人講」という山旅グループを結成し活動していた。

加賀と中村の2人は東京高商（現在の一橋大学）に入学したが、ここには日本山岳会会員の三枝守博（会員番号35）も在学していた。41年（20歳）、日本山岳会に入会（会員番号151）。同時に中村も入会（会員番号153）している。

明治43年8月24日（22歳）、東京高商の学生時代、ヨーロッパアルプス、ユングフラウに登頂。日本

人による、ヨーロッパアルプス最高峰登頂の記録を刻んだ。

ユングフラウ下山後、立ち寄った英国のキュー植物園で洋蘭に魅せられる。帰国した加賀は、天性の美意識の赴くままに、京都大山崎に一大庭園と山荘を自ら設計し、そこに洋蘭温室を建てた。大正3年のことである。関西では初めての洋蘭栽培であった。

大山崎で、洋蘭の栽培や品種改良に没頭し、新品種を次々と誕生させた。さらにその蘭を後世に残すため、版画集を自費出版した。これが「日本の蘭の彩色図譜」の傑作、『蘭花譜』である。

さらに、美の完全主義者であった加賀は、新宿御苑の園丁（えんてい）・後藤兼吉をスカウトし、2人は主従関係を越えて、洋蘭栽培に心血を注いだ。現在、後藤兼吉が「洋蘭栽培の師」といわれる所以である。

また、家業の証券業を再開するなど実業家としても多忙であった。大正14年、茨木カンツリー倶楽部、グリーン委員長に就任。昭和9年、大日本果汁株式会社（後のニッカウイスキー）を設立。

昭和25年、日本山岳会名誉会員に推挙される。29年（66歳）、喉頭がんのため逝去。

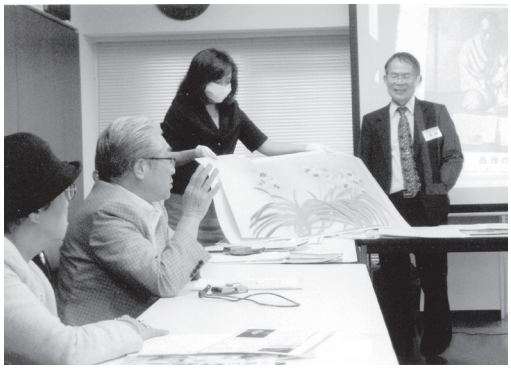
おわりに

大塚講師は、「日本山岳会では、『蘭花譜』をはじめ貴重な文化遺産を多数所持しておられます。今回のように、ぜひ、公開する機会を多くもっていただきたい。

残念なことは、管理に問題があり、貴重な文化遺産に支障が出はじめていることです。今後、管理方法などを検討、改善されてはいかがでしょう。

そして、さらに大切に保管されると同時に、後世に伝え残していかれることを願っています」と結んだ。

（松田雄一）



大塚講師（右）と『蘭花譜』を掲げる上アシスタント（左）

図書委員会――――

第40回山岳史懇談会

図書委員会主催の山岳史懇談会「現代山岳ガイド事情」が3月7日、東京・新宿区の国際協力機構ＪＩＣＡ研究所で開かれた。

公益社団法人日本山岳ガイド協会理事でレ・マーモット代表の中島政男氏、世界7大陸最高峰のガイディングなど高峰登山の専門家である倉岡裕之氏という、世界の第一線で活躍するプロガイドたちに、ヒマラヤやアルプスにおけるガイド登山の最新事情を、美しいスライドとともに語ってもらった。聞き手は、日本山岳会の古野淳理事（ウェック・トレック代表）が務めた。

登山の最新事情について語る、中島氏と倉岡氏

中島氏は、主にシャモニを中心にヨーロッパアルプスのガイドのプロフェッショナルな面や、シャモニの街並みやアルプスまでのアプローチとなる放牧地などのスライドを披露しながら、自身の活動エリアの魅力を説明。ヨーロッパアルプスでの登山は、シャモニやツェルマットといった山麓の歴史ある街を拠点に、人の暮らしが感じられる牧草地、フレンドリーなスタッフが運営する山小屋、たくさんの高山植物や小動物など、人間味と生命感のあるエリアが舞台となっているのが、ヨーロッパアルプスの魅力だという。

倉岡氏は、自身も5回の登頂経験のあるエベレストについて、ベースキャンプから頂上までのポイントを撮影したスライドを使って現代の高所登山について解説。エベレストでは登山者の増加に従ってルートの整備が進んでいること、またアジア諸国がヒマラヤの高所登山に参入してきていることなどの話があった。

（阪辻秀生）

支部だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。

東京多摩・山梨・埼玉支部共催
雲取山三支部合同登山

昨年、企画を立ち上げた三支部合同登山は、1回目は台風、2回目は日本海低気圧による強風のため、延び延びになっていた。今回4月14、15日に3度目の正直、実現のはこびとなった。

しかし初日はあいにくの雨模様、三々五々西武秩父駅に集合。自家用車とジャンボタクシーに分乗し三峰神社へ。総勢17名。10時25分、雨装備での出発となった。雨足もそれ程ではなく風もない、こんななかを登るのも悪くはない。

身体がほぐれてきた頃、霧藻ヶ峰休憩所に着く。埼玉県長瀞町在住の会員・宮崎さんが休憩所を開けておいてくださり、湯茶の接待があった。熱いお茶で昼食をとる。小休止のあと少し下るとお清平だ。ここから前白岩への急登が始まる。

パーティは女性中心の快速組とノンビリ組に分かれる。雨はいつの間にかみぞれ模様に変わった。白岩山に着く頃には本格的な雪に変わり、積雪も5センチくらいになる。芋の木ドッケ（芋の木とはこのあたりでコシアブラ、ドッケは尖った山の意味）のレリーフから登山道は右側のトラバースルートとなる。

雪と落葉の下に隠れて凍結した残雪があり神経を使う。途中からアイゼンを着用。しかし湿雪のためダンゴになりすこぶる歩きづらい。

雲取ヒュッテを過ぎてようやく雲取山荘に着く。17時40分、7時間強のアルバイトであった。快速組は30分前に到着したとのこと。雲取山荘の大部屋ではすでに東京多摩・山梨支部の面々がドリンクモードに入っていた。

われわれも大部屋に集合し、雲取山荘の主人、新井信太郎さん差し入れの大鍋のおでんとビールをいただいた。山梨支部のワイン、東京多摩支部の日本酒をはじめとする酒肴の数々もあり、あちこちで乾杯が始まる。東京多摩支部18名、山梨支部8名、埼玉支部17名、総勢43名の大宴会だ。

三支部代表のあいさつが終わると会員の自己紹介が延々と続く。日本山岳協会会長の神崎会員をはじめ多士済々、どこぞの校歌に「集まり散じて人は変われど……」とあるが、山と酒を媒介としてコミュニケーションを図る（いいですねえ）。こんな企画がどんどん広まればいいと思う。山荘側から消灯時間の声がかかるまで宴は続く。心地よい疲れと充実感で眠りにつく。

雲取山にて３支部全員での記念撮影

翌朝は予報どおり雲ひとつないピーカン、この季節には珍しい白銀の世界、アイゼンが気持ちよくきくなか山頂へ。360度の眺望のなか、支部ごとや3支部全員を入れての記念撮影。名残りを惜しみつつ、東京多摩支部と山梨支部の皆さんに再会を期してお別れをする。

山荘で軽い腹ごしらえをして8時30分下りにかかる。絶え間なく続く山荘への物資荷揚げヘリの音を聞きながら単調な登山道を黙々と下る。14時20分、三峰神社着。大滝温泉で汗を流し、最後の乾杯をして自家用車に分乗、帰路につく。

花見と雪見を満喫の充実した2日間であった。

（野口勝志）

四国支部
総会で「小島烏水祭」開催を決議

日本山岳会の発起人で初代会長の小島烏水（1873～1948年）を顕彰する「小島烏水祭」（仮称）を2013年4月に四国支部が開催することになった。4月29日、高知市で開かれた四国支部第1回通常総会で決議された。

これまで日本山岳会関係者を顕彰するイベントとして「ウェストン祭」や「高頭祭」など幾つかのイベントが各地で催されているが、烏水祭はこれまで開かれたことはない。四国支部は今後、具体的な開催期日や場所、行事内容を関係者らと話し合って決めることにしている。

烏水は1873（明治6）年12月29日に名東県高松で生まれた。名東県は現在の徳島・香川県が合併していた時代の県名。現在は香川県高松市となっている。烏水が高松に住んでいたのは2歳ごろまでで、四国の山岳団体の岳人はもちろん、四国在住の日本山岳会会員にとって馴染みが薄い。烏水は日本に初めて近代アルピニズムを学び広めた功績を残したにもかかわらず、「烏水祭」などの顕彰事業は少なくとも四国では話題にあがらなかった。

四国支部の会員は、支部設立以前から烏水について学ぶ目的で、講演会や烏水の生誕地周辺の見学会などをしてきた。また、四国支部の設立趣意書に「支部として烏水氏を顕彰する活動も大切な役割」と記しているほか、支部設立当初から会員間で「いずれは烏水祭を開こう」という声が多く上がっていた。

総会では、2013年が烏水生誕140年の節目の年にあたることから、来年4月の烏水祭開催を満場一致で決めた。総会に来賓として出席された尾上昇会長からは「ぜひ、実現させてほしい。支援したい」と四国支部にとって心強い言葉をいただき、会員からは「よろしくお願いします」との歓声が上がるとともに拍手がわき起こった。

総会後、烏水研究の第一人者で『小島烏水――山の風流使者伝』の著書を持つ近藤信行元理事からも「過去に烏水祭を開こうという声はあったが実らなかった。四国支部が計画している烏水祭には協力させていただきたい」とのメッセージが寄せられた。

烏水祭に関して、今後、決まった事柄は随時、本部のホームページの四国支部の活動案内に掲載していく予定である。

なお、第1回「小島烏水祭」は2013年4月14日、香川県内で開催予定である。

（尾野益大）

新職員の紹介
庶務担当、藤川志津子さん

6月1日より当会の事務職員として藤川志津子さんが勤務されています。

藤川さんの両親は故・川越孝次会員（2999番）と東京多摩支部で活躍している尚子会員（12235番）。そのため、当会のことは子どものころから耳にしていたそうです。

実際に勤務して会の印象は？

――ほかでの仕事の経験から、事務局の仕事はたいへんだとわかっていました。しかしそれにしても、これだけの大所帯を、少ない職員や本業の仕事を持つ理事が運営しているのはすごいことだと思いました。わたしはまだ手取り足取りで、事務局の皆さんに教わっています。

山登りは？

――北岳に父の散骨に行ったとき、もっと山に登りたくなって、山の会に入会しました。これまであまり行けませんでしたが、これから時間をつくって登りたいと思います。

彼女の山の友人たちは、「ものごとをはっきり言う人。しかし、言うだけではなく、なにごとにもまじめで、真摯に取り組む人」という。会務もたいへんなとき、おおいに期待しています。

（総務委員会）

図書紹介

『信念　東浦奈良男　一万日連続登山への挑戦』

吉田智彦・著

2012年3月
山と溪谷社刊
A5判 224ページ
定価 1575円

まず書名がいい、「信念」。そして表紙の主人公の写真にたじろがず、後は一気呵成に読むこと。

主人公は、1997年オペル冒険大賞チャレンジ賞を受賞した東浦奈良男さん。本書は彼の一万日連続登山への軌跡を、著者の吉田さんが52年分42冊の日記を読み解きながら、時に山に同行し、主人公の信念に共鳴して書いた本である。日記の文体は「自分が水になればよい。どこへでも柔自在」「力は外にあり、体内にはあらず」「一歩が全てを決する」と独特の感覚と思考で哲学的ですらある。

著者は第1章から第4章まで、過去の山行と心の移ろいを辿りながら、未来を刻んでゆく足取りを追う。母親が死に、妻が入院し、自身がひき逃げ事故にあっても、それでも休まない。スニーカーに裸足、雨の日も裸足に長靴で伊勢の山々を毎日登る。これが来る日も来る日も続く。「数字はあくまでも励みです。山は好きだから登っているんです」。

それではこれは登山だろうか。東浦さんはちょっと風変りなだけの人だろうか。行ないは壮絶とも悲壮とも、あるいは人としての業とでも言えばいいのか。その不屈の行為は、継続は力なりと言う諺さえ安っぽく感じさせさえする。

しかし、一万日を目指した連続登山は9737日で終わる。著者に「勝手と優しさに満ちた壮大な抒情詩人」と言わしめた主人公は、「歩くたのしさを存分に味わえる幸せを現代人は忘れ去っている」という警句を残して2011年12月に逝去、86歳だった。登る行為そのものに打ち込み、自らの心に対峙して自分自身を磨きあげた一生だった。

本会会員も心が揺さぶられるに違いない1冊、好著である。主人公の9737日に及ぶ行為の意義については、勝峰富雄さんによる間然するところがない解説がある。

（絹川祥夫）

『愉しき山旅』

高澤光雄・著

2012年4月
北海道出版企画センター刊
四六判 206ページ
定価 2415円

登山史や遺稿・追悼集をたくさん手掛けてきた著者は、80歳を機に自身についての思い入れの多い山や人たちの文を残したいとの気持ちを、この1冊に託した。

その回想には、日本山岳会の組織が変わり若者たちが担ってゆく時代になりつつある今、どのように大先輩が登り、どのように会のなかでまじわってきたかを、札幌に住み、そのような人たちと山行を共にしてきた著書が書いており、著者の思いが心に響く。

巻頭をカラー版で彩る。折々に描かれた絵からもその時々が語られる雰囲気が感じられ、一緒にふり返っているような気分になる。

かつて大島亮吉が「南宋画にあるような景図」と表現した大雪山クワウンナイ川遡行が、札幌の岳人たちによって企てられた。昭和48年9月の4日間の記録は雷雨。熊の出没や、渓の美しさと山の厳しさ、沈着な行動の末に手にした山からの贈り物の尊さを感ずる。

昭和初期、慶応義塾大学や北海道大学による夏の日高山脈神威岳や、冬の執念を知る著者は、6人の仲間と共に冬季未踏ルートを求めて昭和52年10月の偵察と12月本番の難行を語る。

大正13年7月に日本山岳会初代会長・小島烏水が、アメリカ、オレゴン州のフッド山に登った際の著作に惹かれ、このオレゴン州の最高峰に登る機会をもち、平成7年に実現する。著者ならではの感慨が伝わる。

10編収録された「本州の山旅」でも、山岳信仰と登山史が織り込

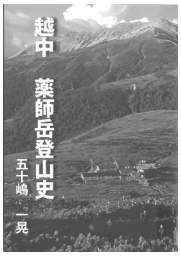
まれていて、読む者は再訪したい気分になる。

時間に縛られ、長い休暇に恵まれなかったサラリーマンにとって、1カ月以上のネパール・トレッキングを定年後に実行することは、どんなことにもまして素晴らしい人生の贈り物だったことかと感じさせる。まして著者は北海道の地元にあって四季研鑽を積み、登山史、絵そして俳句と活動してきたのだ。心豊かな人生のこれからの足跡もたのしみに待たれる。

（穴田雪江）

『越中　薬師岳登山史』

五十嶋一晃・著



2012年1月
五十嶋商事刊
A5判 369ページ
頒価 2000円

薬師岳の登山史を中心にして、その地誌、考証を纏めたもので、読みごたえのある一書である。

薬師岳の山域は実に広い。著者は、北はスゴ乗越、南は太郎兵衛平を経て上ノ岳まで、東は黒部川上廊下まで、西は真川の源頭に当たる寺地山までをその山域としている。それは、著者が生まれ育った旧・大山町（現・富山市）の一画である。著者にとっては故郷の山であり、この山域と、そこに登場する人物に通じていることにおいては他の追随を許さないだろう。

本書の中心テーマである登山史は、前史として、有峰の宗教登山、江戸時代中期から230年間続いた加賀藩による黒部奥山廻り、薬師岳頂上の2等三角点設置に始まる測量登山など、いずれも興味深い話が紹介されている。

薬師岳の近代登山は、明治40年の城川範之らに始まり、同42年7月の辻本満丸、同年8月の田部重治と続く。田部重治は薬師岳を世に広めた郷土の大先輩であり、法大山岳部長として薫陶を受けたとあって、一章を設けて著者の思いを語っている。

薬師岳頂上で「日本山岳会幹事辻本満丸」の名刺を見つけた田部は東京で辻本を訪ねる。それが田部と当時の日本山岳会の中心的なメンバーとを繋ぐきっかけになり、後には木暮理太郎をも引き込むことになる。このあたりは日本山岳会草創期の歴史でもあり、薬師岳と本会の歴史に関する教養として知っておきたいことである。

近代の登山史こそ本書の真骨頂で、記録類を丹念に追いかけた著者の執念に驚く。黒部川遡行の紀行や登山記録を薬師岳の視点から解明するという独創的な作業によってジャンルごとの初登頂を追い、この章だけで100ページ余にのぼる。

大正13年の伊藤孝一らの巨費を投じての厳冬期北アルプス縦断については独立した章で論じる。

昭和38年1月の愛知大学山岳部員13名の薬師岳における遭難から約半世紀。事件を風化させてはならないとの思いから、遭難報告書をもとに、遭難と捜索に焦点を当て、詳述している。

薬師岳北西面に「鳶谷」が2カ所あること、真川源流にあたる寺地山の標高、太郎兵衛平の地名由来など、興味深い話題が巻末に「付属事項」として扱われているが、これらはむしろ本編のなかで語ってもらいたかった。

太郎平小屋など薬師岳周辺の4小屋を経営する五十嶋商事（有）の70周年を記念して刊行。同社は著者の弟さんが経営に当たっている。

（南川金一）

図書受入報告（2012年5月）

著　者	書　名	ページ/サイズ	発行元	刊行年	寄贈/購入別
坂本勇 他	関東周辺やまなみ歩き：きっとみつかる歩きたい山106コース	348p/21cm	新ハイキング社	2012	出版社寄贈
桂 晴美(編)	桂重英画集	120p/24cm	桂晴美(私家版)	2012	編者寄贈
筑木 力	登歩悠遊：山の歓び里の愉しみ	274p/19cm	ほおずき書籍	2011	著者寄贈
加賀正太郎	蘭花譜：大山崎山荘(2刷)	104p/23cm	同朋舎メディアプラン	2012	購入
中村 保	最後の辺境チベットのアルプス	480p/22cm	東京新聞	2012	出版社寄贈
伊藤フミヒロ	富士山ハイキング案内	175p/21cm	東京新聞	2012	出版社寄贈
宮川 哲	テントで山に登ってみよう：テント山行の基本&疑問解決(ヤマケイ山学選書)	223p/18cm	山と溪谷社	2012	出版社寄贈
百名山完登者の会	思い出の山：百名山完登者の会10周年記念誌	100p/21cm	百名山完登者の会	2012	発行者寄贈
山のECHO(編)	自然地域トイレし尿処理技術ガイドブック	100p/30cm	環境省自然環境局	2012	発行者寄贈
藤井洋(編)	ZiyaMadin：深い照葉樹の森と懸崖に守られた未踏峰	74p/30cm	岐阜大学山岳部	2012	発行者寄贈
河鍋楠美(編)	河鍋暁斎挿絵(二)：教科書・啓蒙書ほか	343p/27cm	河鍋暁斎記念美術館	2011	発行者寄贈
MC of South Africa(ed.)	The Journal of the Mountain Club of South Africa (No.113,2010)	164p/24cm	MCofSouthAfrica	2011	発行者寄贈

会務報告

平成24年度第2回（5月度）理事会議事録

日時　平成24年5月9日19時より21時15分まで
場所　日本山岳会　集会室
【出席者】尾上会長、吉永・西村各副会長、高原・森・小林各常務理事、野澤・中山・永田・萩原・節田・古野・川瀬各理事、平井・浜崎各監事、オブザーバー：柏編集人

【審議事項】

1・平成23年度事業報告（案）について（高原）

平成23年度実施事業の説明。

なお、前年度までプロジェクト実施項目は、共益事業に記載していたが、実態に合わせ、公益事業と共益事業に区分けして記載した。平成24年度通常総会の事業報告議案としたい。（承認）

2・平成23年度決算報告（案）について（小林）

特例民法法人としての最後の決算である。25年3期からの公益社団法人としての決算を展望して、公益法人会計基準（平成20年基準）にそった決算を行なった。

今期の決算は、入会者が増えたこと、また修繕費など22年3期の特殊支出案件がなくなったことや人件費の減等もあり、収支が大幅に改善された。

平成24年度通常総会の決算報告議案としたい。（一部字句訂正、並び替えあり）（承認）

3・会費の滞納除籍予定者（高原）

5月9日現在の2年間の会費未納者リストとして98名（団体含む）が示され、今年度中に会費納入がない場合は除籍になる旨、報告された。平成24年度通常総会の議案としたい。（承認）

4・今年度日中韓三国学生交流登山について（森）

本登山（中国主催で、武漢で8月7日より14日まで実施）は、団長に中山理事をあてる。次回以降の実施については、その協議を中山理事に一任する。（承認）

5・学生部インド・ザンスカール遠征計画について（古野）

8月15日～9月28日、当会学生部の5名が、インド・ザンスカール山脈の未踏峰（6165メートル）をめざす（計画書資料あり）。（承認）

6・支部長交代について（高原）

岩手支部：内山達雄（1161 2）会員から菅原敏夫（1176 5）会員に。

福井支部：宮本数男（1062 2）会員から森田信人（1457 5）会員に。（承認）

7・規程類「基金及び積立金等に関する規程」の改正について（小林）

平成22年度理事会において「基金及び積立金等に関する規程」を設け、翌年、同細則を定めたが、公益認定にかかる内閣府からの指導を折り込み、両者を統合改正し、新たに別添の「基金及び積立金等に関する規程」を設けた。字句の訂正等は、公益法人運営適正化PTに一任する。（承認）

なお、本規程は重要と判断し、平成24年度通常総会で報告する。

8・エベレスト登頂60周年（2013年5月29日）記念イベントについて（尾上）

ネパール大使から、ネパール大使館主催の記念イベント「大ネパール展」への協力要請。当会としては実行委員として、井本海外委員会委員長を推薦したい。（承認）

第1回の会合が5月30日予定（他山岳団体、旅行社参加）

9・入会の申し込み（高原）

17名の入会申し込みがあった。（承認）

【報告事項】

1・各PT報告

①法人運営適正化PT「JACへの寄付にかかわる税金について」（小林）

公益社団法人への寄付税制のメリット等をまとめた「寄付に関する規程（仮称）」を制定し、正確に支部などに伝える必要がある。税額控除制度適用の対象法人となるには、2年間の実績を踏まえ、行政庁の証明が必要。

②「山の日」制定PT（西村、萩原）

「山の日」制定協議会は、「『山の日』サミット《みんなで山を考えよう》全国大会」を10月3日に開

催することで決定した。場所はオリンピック記念総合青少年センター。地方自治体をはじめ関係団体に呼びかける。

山の日は、支部のアンケート結果などから、第1候補として6月第1日曜日とし、制定後祝日（月曜休日）をめざす。

今秋11月、第2回「岳都松本〈山岳フォーラム〉」の開催が予定されている。

2・猿投の森隣接地の土地贈与契約（高原）

当会は、猿投の森（東海支部）の隣接地の寄付を受け、4月18日贈与契約を行ない、登記を終了した。

3・監事監査実施について（平井）

5月7日、平井、浜崎両監事は、当会23年度の監査を実施し、別添の通りの報告があった。

4・国土地理院「電子国土賞」の推薦について（森）

当会が推薦する案件を、森常務理事が窓口となりHP等で公募した。現在、PC部門に「カシミール3D」モバイル部門に「地図ロイド」等があった。検討時間の不足もあり一部不明点もあるため、推薦案件の決定は森常務理事に一任する。

5・「国際山岳年プラス10シンポジウム」（6月23日～24日、日大文理学部で開催）（高原）

4月27日、第4回実行委員会が開催された。

6・第12回高尾の森づくり植樹祭の開催（吉永）

4月15日、植樹祭が行なわれ参加者は500名を超えた。

7・日本山岳遺産基金の活動助成団体決定（高原）

「早池峰にはゴミは似合わない実行委員会」「泉・五家荘登山道整備プロジェクト」の2団体。

8・YOUTH CLUBの報告（野沢）

事故遭難がないように、歩留まりを考え、ボトムアップしていきたい。また、ハイキング、基礎講習の参加者を取り込み、辞めないような魅力あるクラブにしていきたい。

9・会報編集の報告（柏）

5月号は、巻頭にYOUTH CLUBの発足。その他、学生部ザンスカール登山隊、カリマンタン島未踏大岩壁登攀チームの記事を掲載する。

10・源泉徴収の扱い方を統一するために指針をつくる必要がある。（平井）

11・志賀尚子理事の辞任（4月10日付）の登記手続きが完了した。（高原）

【今後の予定】

1・平成24年度通常総会、支部長会議（6月16日）（高原）

総会出席者数が2分の1以上必要なので、会報記事や返信ハガキ、封筒に工夫した。各理事は総会参加の返信を呼びかけてほしい。

2・委員会（総務、財務、山研）会議（5月30日18時30分～）

当該担当理事の会議を行なう。委員長との個別および全体会議は事後行なう。

3・公益社団法人日本山岳ガイド協会通常総会に伴う懇親会（5月15日18時より）

尾上会長が出席する。

4・日本山岳協会主催でチベット登山協会歓迎会（5月16日）を開催

吉永副会長、古野理事が出席する。

5・日本山岳協会が第31回海外登山遭難対策研究会（6月23日、24日）を開催

6・中信森林管理署が平成24年度山小屋等関係者打合せ会議（5月11日）を開催

ルーム日誌 5月

1日　図書管理委員会　スケッチクラブ
7日　総務委員会　高尾の森づくりの会　スケッチクラブ
8日　図書委員会　山研委員会　九五会
9日　理事会　集会委員会　山想倶楽部
10日　山岳地理クラブ　青年部スキークラブ
14日　スケッチクラブ　スキークラブ
15日　図書管理委員会　00会
16日　三水会　青年部委員会　つ

日本山岳会団体傷害保険
加入のおすすめ

加入対象者（被保険者）：日本山岳会会員の皆様
会員の方がご加入の場合、配偶者、お子様、ご両親、ご兄弟、会員ご本人の同居の親族及び同居の使用人の方も同時にご加入いただけます。

中途加入可能です。まずは、資料請求下さい！

海外登山の保険、その他損害保険・生命保険全般ご相談も承ります。

資料請求先
東京海上日動火災グループ代理店　**株式会社東海日動パートナーズ東東京**
団体傷害保険資料請求担当：藤田　Mail:a.fujita@tnp-higashitokyo.co.jp
TEL.0120-161-808　FAX.0120-161-809

くも会
17日　緑爽会　山の自然学研究会
科学委員会　海外委員会
18日　フォトビデオクラブ
19日　図書管理委員会
21日　総務委員会　資料映像委員会
22日　インターネット小委員会
23日　自然保護委員会　麗山会
みちのり山の会
24日　フォトビデオクラブ　総務委員会　学生部　山遊会
25日　支部活性化PT　YOUTH CLUB
29日　YOUTH CLUB
30日　自然保護委員会　臨時常務会　スキークラブ
31日　ルーム検討PT
5月来室者508名

会員異動(5月)

物故

坂本　桂（5364）12・5
宮下啓三（5546）12・5・6
久保田全（6053）12・4・9
笠原　宏（7488）11・11
藤原正雄（8354）12・4・29
大久保成幸（8876）12・2・22
青木敏雄（11751）12・1・21

退会

前芝茂人（5235）
中井　弘（5920）
斎藤健一（6020）
寸田　脩（7183）関西
鼎　治紀（7714）関西
増岡栄一（8462）四国
石原　脩（9535）
伴　實（11853）京都
古田和彦（11885）北海道
兼宗房子（11890）千葉
石川千恵子（11893）
安部一紀（12077）北九州
安藤孝則（12601）岩手
阿部武俊（12992）北海道
小川原幸雄（13042）信濃
渋谷年通（13651）北海道
河野通晴（13683）
井上英一（13948）北海道
高田省三（14130）静岡
鈴木泰宏（14224）
藤吉光男（14240）東海
川本修滋（14637）

INFORMATION インフォメーション

◆第30回図書交換会の出品図書募集について　図書委員会

好評の図書交換会を本年度は年次晩餐会の会場で開催します。本棚に眠っている山岳書をお寄せください。

出品図書は7月末日までに、氏名、会員番号を明記して「日本山岳会・図書委員会」宛にお送りください。12月に開催する年次晩餐会の会場で希望者に頒布します。原則として頒布価格は図書委員会に一任いただきますが、頒布が成立した場合は、価格の80㌫を出品者にお返しします。雑誌類は原則としてお断わりします。

年次晩餐会という場を得ることで、多くの会員の参加が予想されます。多くの出品本をお寄せくださるようご協力をお願いいたします。

問合　三好まき子（TEL 090-8019-8601　✉344mm@mbe.nifty.com）

◆「第8回山の博覧会」開催　山梨支部

「第8回山の博覧会―山を知ろう　山へ行こう―」南アルプス特集Ⅱを開催します。山の博覧会は、山梨県「やまなし山の日」および「山の日制定プロジェクト」関連事業です。ぜひご参加ください。

日時　7月7日㈯10～16時

場所　山梨学院メモリアルホール

（TEL 055-224-1355）

内容　「南アルプスⅡ」を特集し、3人の講演と映像上映。講演は、①広瀬和弘さん「ライチョウの今と未来」②河原義彦さん「森と人との対話…あれから40年」③塩沢久仙さん「南アルプスの今」

申込　6月30日までに、山梨支部（✉ymn@jac.or.jp）、山梨学院大学（生涯学習センター）HPから申し込む。昼食の必要な方は同時に予約する。

＊支部会員の写真や絵の展示、山梨の山の本販売、登山用品店の展示即売会を同時開催。

＊入場無料。

◆北ア白馬～栂海新道～親不知を縦走　集会委員会

北ア全山縦走を射程に、白馬から、ウェストンが北アの起点とした親不知まで歩きます。3泊目は自炊、シュラフ要。アップダウンが厳しく長い山行、健脚向き。

日時　9月7日㈮～10日㈪

集合　7日㈮7時半、白馬駅

解散　10日㈪16時頃、親不知

費用　2万5000円（3泊4日）

定員　10名

申込　8月10日までに、清登緑郎（FAX 03-5936-5206　✉rokurou1950@mail.goo.ne.jp）

＊申込者に詳細案内を送ります。

◆ニュージーランド「サザンアルプス登頂」　集会委員会

タズマン氷河からホックステッダードームとアルマー山登頂。マウント・オリビエには、ミューラーハットに宿泊して登頂します。雪解けと共に咲き乱れる花々、NZ特有の植物を求めてトランピングします。

期間　2013年1月21日㈪～31日㈭

装備　アイゼン、ピッケル必携

費用　45万円の予定（サーチャージ等別途負担）

定員　12名（定員になり次第締切）

問合・申込　植木淑美（TEL&FAX 042-734-1498　✉yoshimi-denali@jcom.home.ne.jp）

＊現地説明会を兼ねたスライド会開催。詳細はホームページ参照。

＊申込者に詳細案内を送ります。

『木の目草の芽』5月号を発行　自然保護委員会

自然保護委員会では機関紙『木の目草の芽』5月号（最新号）を発行しました。今号は2012年自然保護全国集会（テーマ＝尾瀬を考える）に向けてのレジュメ号として、集会プログラムや支部報告などを掲載しています。

機関紙は年6回隔月発行、購読料は年間1000円（送料込み）です。購読希望の方は左記までご連絡ください。

申込　川口章子（TEL 047-463-8721　✉syuaki@pony.ocn.ne.jp）

振込先（郵便振替：00180-4-71068（加入者＝川口章子）

◆YOUTH CLUB FULBARIシリーズ開催

YOUTH CLUB初の女性（60歳未満）対象イベントFULBARIシリーズがスタート。初回のテーマは上高地。上高地にまつわる歴史を文化・山岳の両面からアプローチ。Table（机上）とTrip（フィールド）に分けて実施。FULBARIとは、ネパール語で「花咲く庭」という意味。誰もが親しめる庭から、その先にある山へ目を向けてみようという意図。

■FULBARI Table①

期日　7月4日㈬19時より
会場　日本山岳会　集会室
費用　1000円（軽食付き、学生500円）
定員　30名（先着順）
詳細・申込　http://jac.or.jp/info/iinkai/cat596/post-425.html#7m

■FULBARI Trip①

期日　8月11日㈯～12日㈰
場所　大正池～上高地～徳沢周辺
宿泊　上高地山岳研究所
費用　1万8000円
定員　15人（先着順）
詳細・申込　http://jac.or.jp/info/iinkai/cat596/post-422.html

◆日・中・韓三国学生交流会2012

恒例の三国大学生による交流登山。今年は中国の主催により、湖北省にて開催。

期日　8月7日㈫～14日㈫
場所　中国湖北省武漢周辺
費用　渡航費のみ自己負担
問合　担当理事 中山茂樹
✉k-hak.nakayama@nifty.com

■訂正とお詫び

2月（801）号17ページ、会員異動（1月）「山野 巧」の「退会」は事務手続き上の誤りで「退会」は誤表記でした。

4月（803）号、17ページ、会員異動（3月）、退会の「山崎亨弘」は「山岡亨弘」の誤りでした。

5月（804）号、16～17ページ、新入会員、「二俣勝美㊽」は「二俣勝美㊸」、「浅井正行、電話090-4113-6250」は「電話052-808-8726」、「森本信子、電話082-253-6692」は「電話083-253-6692」、「土屋 勇、紹介者、中村純一」は「紹介者、中村純二」、「岡本昭子、紹介者、星 和男」は「紹介者、星一男」、「小川三千男㊷」は「小川三千男㊺」、「山口 章、電話090-9049-4630」は「電話090-3049-4630」、「清野義美、住所、愛知県福島市」は「福島県福島市」、「藤川千恵美、住所、美鈴が丘西1-17-4」は「美鈴が丘西4-17-4」、「三瓶恵子、住所、八山田字節上原又」は「八山田字節上原2」の誤りでした。

訂正してお詫びいたします。

連絡ミスによるチェック漏れが生じ、多くの誤りがありましたことを深くお詫びいたします。今後は、二度とおこさないよう努めます。（事務局・総務担当理事）

❖編集後記❖

●ヒマラヤから嬉しいニュースがふたつ。渡邉玉枝さんと村口徳行さんのエベレスト（本号掲載）。もうひとつは8000メートル峰14座完登した竹内洋岳さん（次号掲載予定）。三者とも、スタイルこそ違えど清々しい登山であるのはなぜだろう。信念強く、そしてたおやかな精神によるものだろか。（柏 澄子）

寛仁親王殿下（会員番号10002）のご薨去の報に接し、謹んでお悔やみ申し上げます。

6月8日、会を代表して尾上昇会長が弔問記帳いたしました。

総務担当理事

新医療連載スタート「山の診療所」

皆さん、体調や病気、ケガなどに心配事はありませんか。「持病持ちだけれど、どうやって登山を続けたらよいか」「山中で足を捻挫。こんな手当てをしたけれど、よかったのか」「最近、登りで息切れが激しい。体調が心配」「苦手な下りが克服できず。膝が笑いっぱなし。よいトレーニングは？」「雪山でしもやけみたいになってしまった」「日焼けがひどく、皮がむけて炎症が。皮膚科へ行くべき？」など。

皆さんからの質問に、日本山岳会医療委員会メンバーの専門医がお応え、アドバイスします。質問をお寄せください。

質問送付先：jac-kaiho@jac.or.jp（会報編集委員会）

日本山岳会会報　山　805号

2012年（平成24年）6月20日発行
発行所　公益社団法人日本山岳会
〒102－0081
東京都千代田区四番町5－4
サンビューハイツ四番町
TEL　東京(03)3261－4433
FAX　東京(03)3261－4441
発行者　日本山岳会会長　尾上 昇
編集人　柏 澄子
E-メール:jac-kaiho@jac.or.jp
印　刷　株式会社　双陽社